

情 報

J-STAGE のアクセス統計を利用した日作紀の利用状況の解析

松村 篤

(大阪府立大学生命環境科学研究科)

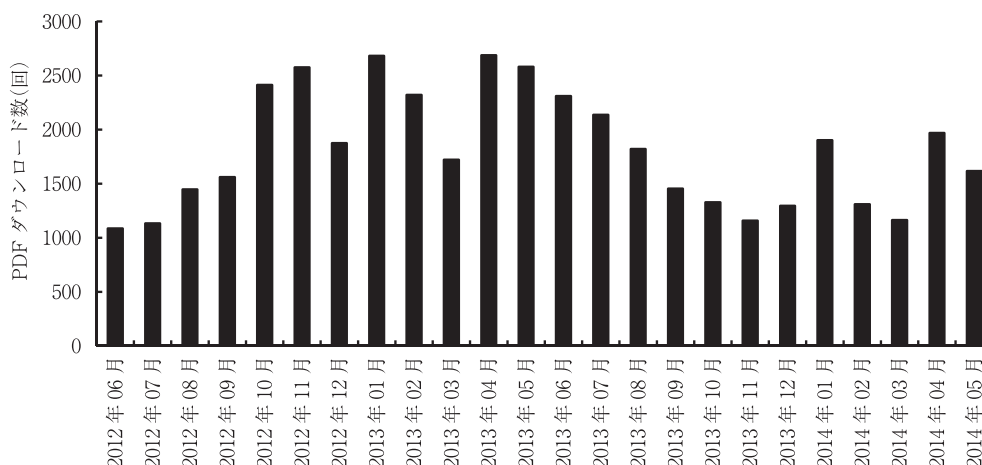
JST (独立行政法人科学技術振興機構) が運営している J-STAGE (科学技術情報発信・流通総合システム) は、日本の学協会発行の学術論文を電子ジャーナルとして公開するサイトである。J-STAGE では、公開されている学術論文に対してのアクセス記録を毎月レポートとして提供している。J-STAGE から提供されるレポートは、資料全体のアクセス数を集計したサマリレポート、掲載論文ごとにアクセス数を集計した記事別レポート、アクセス元の IP アドレスが割り当てられた国ごとにアクセス数を集計した国別アクセス数、ドメインごとにアクセス数を集計したドメイン別レポートなどに分けられている。これらのデータを整理することで月単位や年単位での雑誌の利用状況を知ることができる。日本作物学会紀事 (以下、日作紀) は 2012 年 6 月から J-STAGE に学術論文が掲載されており、約 2 年分のデータが蓄積しているが、これらのデータを整理するには至っていない。日作紀の利用状況を会員の方々に周知することが重要であると考え、今回、日作紀編集幹事の立場から、J-STAGE のアクセス統計を利用した日作紀の利用状況について情報として提供する。

データは 2012 年 6 月から 2014 年 5 月までのものを対象とし解析を行った。なお、この期間内に発刊された巻号は 72 巻 1 号から 83 巻 2 号である。また、WEB 上でアクセス

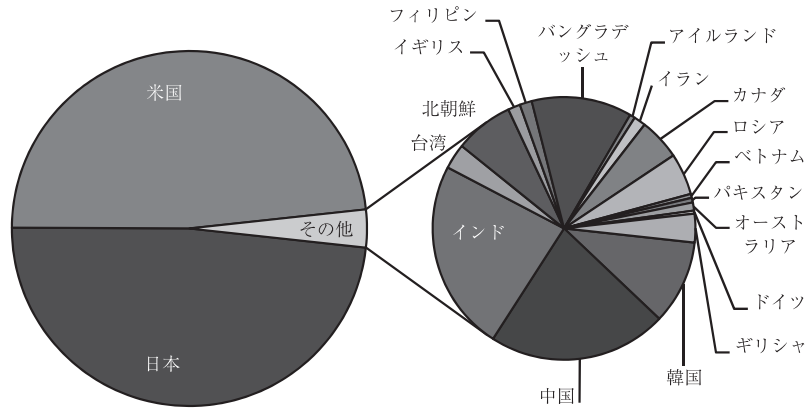
する画面は主に資料トップ、書誌事項、全文 PDF、引用文献、検索実行などがあるが、ここでは全文 PDF のアクセス数に着目して利用状況の説明をしていく。

まず、日本国内ドメイン (ac.jp, co.jp, go.jp, or.jp, ad.jp, ne.jp, gr.jp, ed.jp, lg.jp, その他) を対象に全文 PDF のアクセス数をみている。第 1 図は 2012 年 6 月から 2014 年 5 月にかけて、日作紀に掲載されている論文のいずれかを上記のドメインからアクセスした合計数を月毎に示したものである。アクセス数が最も少ない月で 1087 アクセス、最も多い月では 2688 アクセスであり、平均 1815 回アクセスされている。ドメイン別にみると、ne.jp, ac.jp および go.jp からのアクセス数が多い傾向にあった。ne.jp は日本国内のネットワークサービス提供者が利用者に対して提供しているネットワークサービスであり、ac.jp は大学や大学共同利用機関、学校法人、職業訓練法人などが含まれ、go.jp は日本国の政府機関や各省庁所轄の研究所である。

次に、国別のアクセス数についてみる。第 2 図は、2012 年 6 月から 2014 年 5 月のデータを対象に月別のアクセス数の平均値を割合で示したものである。最もアクセス数が多い国は日本、次いで米国、インド、中国、韓国の順であった。日本と米国の 2 国のアクセス数は圧倒的に多く、両国間のアクセス数はどちらも平均 2440 回程度となり僅



第1図 2012年6月から2014年5月までの月別PDFダウンロード数。



第2図 2012年6月から2014年5月までの国別PDFアクセス数の割合。

差であった。2013年ではむしろ米国の方が日本よりもアクセス数が多かった。その後、大きく差が開いてインドで41アクセス、中国で38アクセス、韓国で18アクセスであった。一方、月によってはアクセス数が非常に多い国があり、例えば、2014年3月ではバングラデッシュで409、ギリシャで147アクセス、2013年7月ではロシアで133アクセス、2012年9月では北朝鮮で281アクセスと集中して全文PDFがダウンロードされている月があった。

記事別レポートからは、それぞれの掲載論文が1ヶ月に何回ダウンロードされたかについての情報が得られる。直近の2014年5月についてみると、論文の平均アクセス数は5.1回であり、最も多かったものでは48回アクセスされていた。72巻1号から83巻2号の掲載論文723報についての2012年6月から2014年5月までの論文別の累積アクセス数は平均171.8回であり、最も多かったもので

は1339回、最も少ないものでは25回であった。また、閲覧回数が上位であった論文の多くは、総説やミニレビューであった。

以上、2012年6月から2014年5月までにJ-STAGEから提供された日作紀のアクセス統計レポートを用いて利用状況をまとめた。全文PDFについて国内ドメインでは毎月1800回を超えるアクセスがあったことから、日作紀に掲載されている論文が多数の研究者や学生にとって研究の参考になっていると思われる。また、国別アクセス数について、米国が日本と同程度であったことから、日作紀の論文が日本国内のみならず国外からも関心の目を向けられていることを示す。最後に、日作紀への投稿数がやや減少傾向にある中、本情報が日作紀への投稿を考える契機の一つとなれば幸いである。